

基礎科生のあゆみ

河野さんの場合



油画科夜間部在籍
高校1年生 3学期立美入学
河野真歩 さん



私にとって基礎科とは原点です。基礎科に入ったばかりの時はデッサンがわからなくて、下手な自分が嫌で、すぐつまらなかったことを覚えています。その上、当時高2だった先輩たちが多かったので友達もいなくて、正直タチビに行くのが好きではありませんでした。しかし、私が高2にあがると先輩たちも受験科にあがり、同い年の生徒が増えていきました。いつからともなく友達ができはじめ、夏期講習くらいには、私たちは既に学校のクラスよりも仲が良かったように思います。先生も含めたみんなで、絵のことも、くだらないことも、たくさん話しました。(受験科にあがった今でも、基礎科の先生や友人たちとはとても仲良くしています)

絵について話せる、気の合う友達ができたおかげで、私は デッサンとはなんぞや? と考えるようになりました。その頃から絵を描くことが楽しくなったし、うまくいなくて苦しくても、足は自然と基礎科に向かっていて、むんむん言いながら描いてました。絵を描く体力みたいなものがついていたのかなと思います。

今の自分の制作における、まさに「基礎」の部分を作り上げてくれたのは基礎科です。基礎科ありがとう大好き!!!!



初めてのデッサン

立美に来てはじめて描いた、名前もわからない石膏。コーレと言うらしいです。どうすれば良いのかわからず、ぐだぐだしてたら先生がほとんどカタチをとってくれて、私ははじめての木炭デッサンを塗り絵感覚で終わらせてしまいました、、、先生がいちから優しく教えてくださったので、そのあとのデッサンからはもちろん一人で描いていましたが、もうぼろぼろでした。



ブルータス 木炭デッサン

高2の1学期最後のコンクールでのデッサン。まっくら。一応ブルータス(?) 当時はほとんど何もわからなくて、基礎科の先生の言ってることもわからなかったから、とにかく描いた。絵描くの楽しい! うひょお! ってひたすらに思っていた。講評の時自分の絵に初めて順位がついて、なんだかムズムズした。



自画像

高2の11月、夜間部合同コンクールでの「手を入れた自画像」という課題。まっくら。この頃から木炭を扱うことの面白さを知って、素材を楽しみながら絵を描くことができるようになった気がする。ちょうど何科に進むかムチャクチャ悩んでいた時期で(結局基礎科の卒業式の後に油に決めました)、今これを見ると油だろ、と思う。画面がまっくらになって收拾つかなくなった私を見るに見かねた基礎科の先生が、コンクールなのに、こっそり「黒すぎるよ(笑)」って教えてくれたのが良い思い出。



人物油彩 油絵科に入って三枚目?の油 やつとこさ油絵科に入ったら、油絵の具が謎すぎてやばかった。

今度は油絵科の先生の言ってることが全然わからなかった。画面に対してどんなことをしていけばいいのかわからず、度胸もなかったたのでこの頃の絵はとにかく弱い。講評の時、色が綺麗と言われ、その頃から無意識のうちに色のことを考えるようになった。(後に色のことを考えるとき、色のことだけを考えると迷宮入りすると知る。)



人物デッサン

夏期講習のとき。夏期講習では技術的な面でいろいろとわかってきて、これは割とぐーんと伸びた一枚。このモデルさんは、細やかに編まれたカーディガンと、複雑な柄の、長い丈のワンピースを着ていた。それまでの私だったら、絶対描きたくなえっ!なんて思っていたのだろうけど、この時はその複雑な表情を描きたくて追いたくて夢中になっていた。描き込むことの楽しさを知れた一枚。



人物油彩

夏期講習とタチビ祭を終えて、10月の通常授業での人物油彩。油絵の具のこともそれなりにわかってきて、意図的に新しいことを取り入れていこうとしていた時期。(今もそんな感じです) 描いていくと画面を均してしまっ、立体感がなくなる癖を打破したかった。考えた末、タッチだ! タッチ! と思ってタッチしてた。画面にタッチしてタッチを与えた。(←は?) 初日は冒険してるみたいで楽しかったけど、2日目からはなかなか不安で怖かった。そんな中で完成したこの絵は、個人的にはすき。



静物油彩

11月の通常授業での鬼モチーフ。静物油彩。これはもう二度と描きたくない。でもこの油彩はそれまでの総まとめ的なものになった。タッチもしたし描き込みもした。その他、その時点でできることをツメが甘いながらも一枚にできたのかなあ、という感じがする。伸びた分がこの一枚で、スッとまとまって、同時に新しい課題をたくさん知ることができて興奮した。



「対峙」

立美祭出展作品
F100 号キャンバス

人の目は、宇宙の底のような色をしている。それは少し気持ち悪くて、ぞっとするくらい暗い。怖い。私は宇宙の底をまだ見たことはないけれど、人と関わっているとよく思うことだ。そう感じるようになったのは高校に入ってからだったように思う。その頃から人と関わる、中でも主に、人と話すことが極端に怖くなった。私は元々、人と話すことが好きである。話している相手のことを知ることができるし、自分の視野を広げることできる。また、誰かと繋がっていれば自分の存在を確認することもできる。他と繋がりを持たずして生きていくことは、私には不可能に近いことだ。

しかし私は、誰かと話している時、その人の時間や口、存在までも殺しているような感覚になる。自己嫌悪に近い罪悪感に襲われる。なぜなら、人とどんなに関わっていても、結局のところ本当の意味では理解することができず、分かり合えないと感じているためだ。私の感情も他人の感情も常に移ろい、さっき話していたことが次の一瞬にはもう嘘になっていたりする。私はたくさんの人と関わりを持っていたいのに、同時にそれがとても恐ろしい。私にはいつも虚無感ばかりが残り、付き纏う。

タチビ祭で人を描いたのは、日頃からこのようなことを思っていたからだ。私なりに絵の中の人と精一杯向き合っ、人と向き合うことはどういうことなのか、制作を通して今一度考え直したかった。また、その疑問と答えを見てくださった方と共有したかった。

モチーフは、私やタチビ祭にいらっしゃる方々とは、なるべくかけ離れた存在にしようと思い、西洋人の 20 代くらいの男性を描くことにした。大きなキャンバスに人だけを。他の要素は何も描かないと決めた。描いていくうちに、彼はチリ在住の 26 歳で、ライターをしていて、お風呂に入ることが好きで、タバコの銘柄は〜、等々、私の中の彼がどんどん出来上がってきた。制作中は彼と対話しているようだった。タチビ祭で展示したことによって、新たな関わりが生まれた。知らない人や友人からのコメントは私に新しい見方を与えてくれた。初めて人と関わり合えた気がしたし、絵を通して人と向き合うことを知れた。

すべてのことが分かったわけではないし、これからも分からなくて苦しいと思う。私はそんな苦しみを素直に感じて、受け止めて、昇華するように制作を続けていきたい。

基礎科生のあゆみ 長瀬さんの場合



基礎科在籍
高校1年生 12月立美入学
長瀬 碧 さん

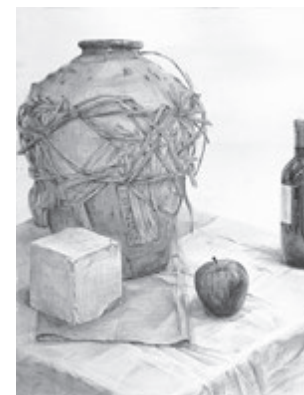
私が基礎科に入ったのは高校一年の冬期からだった。冬期中はじめて経験する事ばかりでずっと緊張していた。また誰が先輩で誰が同学年なのかも分からなかったので、冬期はとにかく課題に対応することに集中した。春期に入ると段々と友だちが増え、立美にも慣れてきて一気に楽しくなった。特に夏は一日中ずっと立美にいたので、デッサンが上手いかない時や行き詰まった時などは他愛もない話のできる友達の存在はとても大きかったと思う。今でも基礎科の友達とは話したりもする。一年を通して基礎科はデッサンが主だが、モチーフは様々で、画材も木炭と鉛筆など自分で決めることができる場合も多いので、かなりバリエーションが豊富だったと思う。いろいろなものを描いていくなかで、参考を参考にするなどしながら確実にデッサンの基礎力をつけていけたと思う。またひとつの課題に取り組める期間が長く、作品とじっくりと向かい合えるのもよかったと思う。基礎科では友達と楽しみながらデッサン力を鍛えることができ、とてもいい経験だった。



石膏デッサン 木炭 マリエッタ
初めての木炭で初めての石膏デッサン。木炭の扱いに苦しみながらも、とにかく見えたまま描いていった。描き込むことが楽しくて、気づけば銅像のようになってしまっていた。



自画像デッサン 木炭 夏期講習
高校2年の時の夏期講習中の作品。自画像以外は想定デッサンで、写真などを参考にしながらかなり楽しんで描くことができた。ビー玉のガラス質がもつきれいに描きたかったが、それでも木炭で様々なものを描いたことはとても勉強になった。絵全体としては夏の爽やかな雰囲気を出せたいなと思いながら制作した。



静物デッサン 鉛筆
とにかく大きな壺に巻き付いている藁を描くのが大変だったが楽しかった。静物デッサンは様々な質感のものがあ、それらを描きわけることが新鮮だった。



細密デッサン クロワッサン
おそらく初めの方の細密デッサン。端から端まで描くのはとても大変だった。クロワッサンの中のバリバリな質感を出すのに苦労したが、ものをひたすら見たまま描くというのはいいい経験になった。



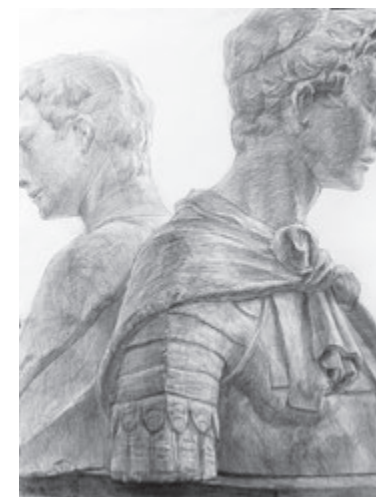
人物デッサン
基礎科で最後の方の課題の人物。人物はクロッキーで描いたことはあったが、デッサンははじめてで、とても楽しかった。特に服や靴の表情を追うのが楽しかった。背景までいれて描いたが、なかなか人物とのバランスをとれず、背景を入れる難しさを知った。



石膏デッサン バジヤント
デザイン科に移って初めての石膏デッサン。光が石膏全体に当たっていて、白く描くのが難しかったが、初めて描く石膏だったので興味をもって描くことができた。もつきれいな光で描けるようになりたいと思った。



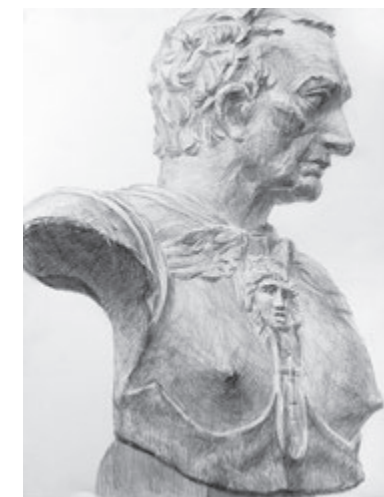
平面構成 ROBOT
デザイン科で初めての平面構成。まだ平面のことはほとんどわからなかったが、案を絞り出して制作した。すぐ近くで合格者の方々が作品と一緒に制作しており、また先生からもアドバイスを頂いて、得るものが多い課題だった。



組石膏 ジョルジョ
夏期講習中の作品。なかなか石膏を2体以上描く機会はないので、描くものはたくさんあるが、面白かった。2体の石膏が背中合わせになっているという状況の説明だったり、石膏自体のクオリティだったり、考えることが多く、画面を見やすくすることを気にするきっかけとなる作品だった。



平面構成 高校3年2学期
喜怒哀楽をテーマにした平面構成で、モチーフには紙やトマト、パン、カキなどが渡された。私は悲しみをテーマに製作し、それが見る人に伝わることを一番重視した。しかしモチーフが不明瞭になってしまったので気を付けたいと思った。また青色というのが少し単純すぎるかとも思った。もつ悲しみの表情の具体的な設定をして、相手に伝わりやすくなりたいと思った。



石膏デッサン ガットメラータ
冬期講習の作品。もともとガットメは形を取るのが苦手な像ではあったので、形を特に気をつけて描いた。また、手前から光が当たっている感じや、像のもつ強そうなイメージを意識して描いてみた。

基礎科生のあゆみ



デザイン・工芸科夜間部在籍
高校2年生 3月立美入学
原島 敏郎 くん

高2の春期講習で初めて立美に行った。最初のデッサンは何もわからず自信もなくて、記念すべき第一筆はすぐに消した。中学生もアドバイスを貰いなんとか描き上げると不思議な達成感を感じた。(しかしその日の帰り道で当時好きだった先輩から「原島君とは付き合えない」とメールが来て達成感をあっという間に哀しみが覆い尽くしたことは内緒だ)そして無事に春期講習が終わり、僕は立美の基礎科の週3コースに入学した。立美の、基礎科は、温かい

ところだった。そりゃあ良いことばかりではなく、デッサン中は尻も背中も痛くなるし目も乾くし、上達もなかなかしなかった。中学生も高1も高2も居て、色んな価値観や悩みの溜まり場で、それは良いことだったけれど疲れることも自分がちっぽけに思えることもあった。それでも基礎科に集まる人たちの言葉と心は温かく感じられ、僕は少しずつ成長することができた。基礎科で先生と、友達と語り、学び、制作をした時間は忘れない。



高2 5月

入学から一ヶ月が経って、僕は木炭ではなく鉛筆でデッサンをしていた。三枚目くらいの石膏デッサン、木炭に比べて黒がのらないということにここからしばらく悩まされることになる。形もとれず色ものらず、髪や服の凸凹なんてどうやって描くんだ、と思いながら、とにかく見たまま描くようにしていた。当時の苦悩を思い出せる一枚。



高2 11月

合同コンクールで自画像を描くと聞いて、前髪を切ってきた。受験科に混ざって描くのは緊張したが、近くに基礎科の友達が居たのが救いだった、女神かと思った。このデッサンの僕のポーズは、今も昔も謎だが、当時の僕は、「描き切ったぜ…」と満足気だった。先生達には、「マネキンみたい」「構図悪い」「ポーズ謎」と酷評だった。ほんとにその通りだ。



高2 1月

初めてのデザイン科は戸惑ったが、なんとかエスキースをして本番に取り組んだ。ヒヨコがお喋りしているのをイメージしてデザインした。ビヨビヨ鳴いているヒヨコは何もわからないでいる当時の僕のような。 (今もヒヨコ子だけれど)けれど僕は一生、成長を続けるヒヨコでいたい。そう思う初めての平面構成。



高2 2月

高校のテストのせいで遅めのスタートになり焦って描いていた。しかし少し急いで描くことで、普段より無駄な仕事が減りどんどん進んだ。モチーフの質感を出すことをいつもより意識していた。そして、何を隠そうこのデッサンは基礎科の時に僕が唯一、上段の一位になったものだった。大したことじゃないと思う人もいると思うけれど、僕にはとても嬉しいことだった。そんな思い出の一枚。



高3 8月

高3の四月からデザイン科に入ったけれど肝心の平面構成が苦手だった。いつもアイデアがまとまらずエスキースが辛かった。これはパブリカと任意の漢字一文字を使った平面構成。パブリカを漢字で斬ろうとすぐに思いついて画面構成も色もすぐに決まった。漢字被りそう、マイナスイメージの画面じゃないかと思いつつも悩み疲れていた僕は構わず描き切った。浪人生と漢字が被って完敗だったが、悩まず描いて楽しかった。これ以降また悩み続けるのだけれど、肩の力が少し抜けた。



高3 9月

この頃デッサンの上達が停まっていると感じ焦っていた。この時は僕が尊敬しつつも恐れている先生に、「見方も色の乗せ方も雑。形が狂ってる。もっていいいに見ろ」と言われた。上手く描けずマルスに申し訳なかった。ていねいに見ることの大切さを痛感し新たな課題の生まれた作品。



彫刻科夜間部在籍
高校2年生 9月立美入学
田中 海 さん



基礎科に入学したときは、はじめての事ばかりでとても不安でした。鉛筆ってこんなに使うんだ、木炭ってバーベキューで使うだけじゃないんだ、ちゃんと描けなかったら怒られるのかな?どうしよう! だけど先生が笑顔で「楽しく描けばいいんだよ」と言ってくれたので、落ち着くことができました。言われた通り楽しく、頑張って描いたら褒められて嬉しかったです。それからは描くのがとても楽しかったです。立美で友達が出来てからは、いろんな話をしたり、みんなの

作品を見たりして、上手になりたいと思うようになりました。みんな描くことに一生懸命で、夢中で、その雰囲気嬉しくて、楽しかったです。科を決めるのも各科体験して1番楽しかった彫刻科にしました。受験科に入ってから、思い通りにいかないことはたくさんありますが「描くこと、つくことは楽しい」という基礎を基礎科で学べたので嫌にならないです。今では基礎科の先生方や友達、勇気を出して基礎科に入学した自分に感謝しています。



高2 秋

立美にきてはじめて描いたのが自画像でした。はじめての事だけに私は緊張していましたが、基礎科の吉原先生が「緊張しないで描きましょう!と自分なりに描きました。隣で描いていたひかりちゃんとお友達になりました。



高2 秋

はじめての石膏デッサンでした。白いしモジャモジャだけど、とにかく描いてみよう!と自分なりに描きました。隣で描いていたひかりちゃんとお友達になりました。



高3 夏期講習

夏期講習に入り、夜は毎日人物デッサンでした。今までのモチーフは動かないものだったので、生きているモデルさんを描くのはとても新鮮で毎回ワクワクしました。



高3 夏

いつも講評で「全体を見てつくりましょう!」と言われていたので、自分に言い聞かせながらつくりました。夢にも出てきました。長い時間をかけることができたので、限界まで頑張れたと思います。楽しかったです。



高3 冬期講習

教室の端にいつも置いてある樹根。端にいても存在感のある、どっしりかっこいい樹根になれ!と念じながら描きました。



高3 冬期講習

デッサンは難しいなと改めて思いました。



基礎科生のあゆみ



デザイン・工芸科夜間部在籍
高校1年生 10月立美入学
渡辺 由衣 さん

中途半端な時期に立美に入っ
て、初めは友達も出来ず、不安
でいっぱいだったのですが入
って数ヶ月は上達するのが目
に見えて、だんだん楽しくなり
ました。キノカのアットホーム
な空気が心地よく、週に3日以
上行くときもありました。キノ
カで学んだことが、今の自分を
助けていると思います。



高1 10月
鉛筆の削り方も知らず、周りの空気
に圧倒されながら描いた覚えがあ
ります。色はのってないし形は一つ
も合っていないので、書き終わった時
はとてもはずかしかったです。初め
て絵がうまくなりたかったきつ
かけの一枚です。



高1 12月
まだ静物もあり描いたことのなか
った時ですが、布と石膏のお面?を
描くのが楽しくて、初めて夢中にな
って描けたデッサンです。となりで
描いていた上手い人を盗み見なが
ら描いていました。



高2 5月
初めての平面構成で、何
をしたらよいかわから
ず、とりあえずやりたいこ
とをやった。デザイン科
に行きたいと思ったし、
絵で人に何かを伝えるの
は楽しいと思った。

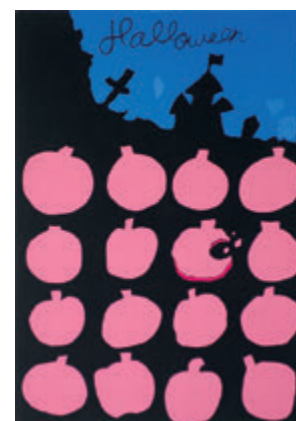


高2 7月
キノカで最後に描いた
デッサンで初めて木炭
を使ったデッサン。鉛筆
との差に戸惑いながら
も、最後と思って思いつ
きり描けたのに、先生に
はもっとやって良いと言
われてショックだった。



高3 夏期講習
私は平面構成が苦手で、いつも
特に変わったことはせず、逃げの
表現ばかり使っていました。夏期
の夜間平面は、体力的にも精神
的にも追い込まれている中でアイ
デアを出すのが本当にキツかつ
たです。この平面も含め、また上
手くいかなかった…といつも落ち
込んでいました。

夜間部
デザイン・工芸科
基礎コースへ
移動



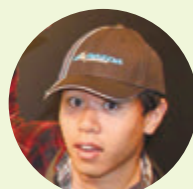
高2 10月
作家研究でやったハロウィンの平面
構成。今見るとすごくおとなしめだ
けど、絵の具を使うのは楽しいと感じ
たし、周りの高3に追いつこうと必死
でした。



高3 11月
デザインについての知識が増えて
色んなことを考えなければいけな
くなり、苦手な平面を描写でなんとか
した一枚です。この講評では、自分
でも思っていたことを先生に言われ
てとても後悔しました。

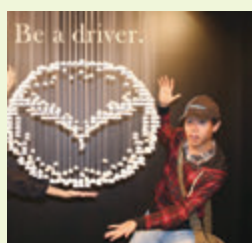


高3 12月
高3になって仲間も増え、石膏に対して
色んなことを考えて描くようになるこ
とができました。このデッサンは全然似
ていないけれど、これ以上書き進めると
クセが出はじめるよと言われて色々学べ
た一枚です。



デザイン・工芸科夜間部在籍
高校2年生 7月入学
藤本 啓太 くん

クルマのデザインをするのが昔か
らの夢で、美大に行きたいとい
うのは中学生の頃から漠然と考えて
おりました。
高校2年で学校の美術の先生に紹
介されてタチビ基礎科の夏期講習
に参加することから始まりました。
当時の私は塾の類いを毛嫌いして
いて、どうせ“受験ダ受験ダ!”とば
かり言っているんだろうと思って
いました。しかしその予想は大きく外
れました。基礎科は受験のための
絵をただギチギチと教えられるの
ではなくて、基本を学びながら自
分のスキルを上げていこうという
スタンスですから、非常に気楽に



通うことができました。もちろん、
受験のことを考えていないわけ
ではなく、後の受験に向けて役
立つことをフレンドリーな先生
から丁寧に学んでいくのです。
しかし厳しい部分もあります。絵
は最初はなかなか上達しない
し、受験科に移った今でもまだ
まだ発展途上で、正直もっと早く入
っていればよかったかもしれな
いと思っています。ですから、もし
今、美大に行きたいと思っている
のなら、すぐにでも予備校に
通うことをお勧めします。そして、
個人的には、予備校に通うなら
タチビを勧めます。



高2 夏期講習
タチビ初作品。部活で一度
木炭を使ったことがあるの
で、それほど混乱はしません
でした。しかし、石膏像は当
時1種類しか知らなかったの
で毎回出てくる像が“はじめ
まして”だったことには苦労
しました。



高2 夏期講習
夏期講習が終わりに近づい
て、当時の自分なりの集大成
として書いたもの。いつもと
ちょっと違うモチーフや画材
を指定されましたが先生の
助けも借りながら納得のい
くような作品にしようとし
ました。



高2 9月
自己紹介時の絵。自画像がテーマ
でしたが、私は某自動車漫画風
にしてみました。みんななかなか
面白い自画像を描いていました。



高2 初めての平面構成
箱をモチーフにピクリさせなさいというテーマ
でした。右も左もわからないままとりあえずや
ってみようということで私は箱の中に会議室を作
ってみました。



高3 4月
デザイン科に入っ
ていよいよ受験に向
けて本格的に描き始め
たデッサン。



高3 9月
タチビ祭の作品。まるっきり自由なので参考までに。



高3 11月
2学期終わりの課題。自分の写真を撮ってそれを模写する
という何ともシンプルなものでありましたが、鉛筆での色
の乗せ方等、学ぶことが多い課題でした。

基礎科生のあゆみ



油画科夜間部在籍
高校1年生 12月立美入学
林 裕人 くん

絵というのは描くほどに何が何だかよくわからなくなってきて、僕にはまだ語れることはそんなにないのだけれど…。正直に言えば一番好きな作家はピカソでもダヴィンチでもリヒターでもなくて奈良さんだし、僕には誠実な絵画的探求心はないのかもしれないと思う。それでもタチビに来れば嫌でも絵は描くし、たまにいいこともある。とにかく今は描いて描いて、いろんなものを見ていろんな人と会って世界を広げていきたいと思っている。



初めて木炭で描いた石膏
なんか使いづらいし、木炭で描く必要がある?と思いながら描いていた気がする。



多分基礎科時代最後のデッサン
見返してみると、着実にうまくはなっているようだ。背中が中心が裂けてて脱皮しそうな感じが面白いけど、別に狙って描いたつもりは全くない。基礎科時代はただ淡々とデッサンしてただけな気がする。何が良かったのかじゃなくて、ただ見て描く、それだけ。上手くはなったと思うけど、保留期間はできるだけ短くして身の置き所を決めるほうがいいと思う。



初めての油彩

基礎科時の油絵科体験で描いたタチビ初の油。なんて素直できれいな作品なんだろうと思う。日本画科ともちょっと迷っていたけれど、この一枚で油に決めた。ただ、今これを見ると自分がはたして進化してるのか退化してるのか、真剣に疑問に思う。



高3春季の静物

とても迷走している。静物なんて普通に描いてもなー、と思っているいろいろやってみたけれど、別に面白くもなんともなかった。基礎科から油絵科に移って、「ただ対象を描いても仕方がない」という意識がずっとあったのだけれど、それがかなり悪い方向にむかっていた。絵画において自分は何が好きなのかわからなかった。今もよくわからないのだけれど。



高3夏のイメージ油彩

タチビとは関係ないのだけれど、高3の6月に文化祭で自分を中心に美術部の展示で色々とはっちゃけたことが出来たのがいい経験になった。作品を作るという意識が出来たのかもしれない。この絵は薄塗りで描き始めたけれどなんとなくよくしなかったで絵の具をぶっつけてみたところ奇跡的な成功を収めた一枚。今までやってきた技術や手法とはほとんど無関係に感覚で描いていた。好きな自分の絵が出来た。ただこういうのが奇跡的に成功してしまったために余計に絵というものがわからなくなった面もある。



高3冬のバジャント

課題は「石膏と自然」。敢えて言うと、すごく良い。もうちょっと石膏像に空間がかかってくると…、もうちょっと面積比とか構図のこと考えて…先生はそんなこと言ってたような気もするけど、自分が「こんな感じ」と思っていたものがある程度の完成形になって、僕はとても満足だった。色々考えた結果、自分は絵画的には空間に興味があるみたいだとわかった。これは大発見なのだ。受験が目前に迫ったからこそ一枚一枚で、今回は何をどうしようみたいなことをしっかり考えるようになった。もっと前から考えていればとは思うけど、過ぎたことは仕方ないし、これからあと少し(で受験を終えるためにも)、精一杯描いていきたい。



日本画科昼間部在籍
高校1年生 6月立美入学
佐々木 慧 さん

高1の6月くらいに基礎科に入った。最初は土曜クラスで、高2になって週3クラスに移った。基礎科では、幽霊学生だった。本当にたまにしか行っていないで、それでも普通に課題をやらせてもらえてありがたかった。絵の基礎の基礎は、全部基礎科で教えてもらったと思う。幽霊学生だったけれど、基礎科の2年間は楽しかった。美大に興味があるけれど、何も分からないという人は、基礎科がオススメですよ。先生が優しく基礎から教えてくれます。日本画にも来てね!!



恐らく初めての石膏
全然記憶がない。木炭は上手く扱えず、これとあと一枚くらいしか使っていない。



高2の冬期講習で描いたデッサン
基礎科の頃は構成デッサンが好きで、これも楽しかった。



高2秋

高2の秋に日本画体験で描いたもの。普段やらない着彩が楽しくて、珍しく熱心に週4くらい通った。

大半の基礎科生は緊張してか、離れて作品を見る余裕のない中、頻繁に離れてしかも、作品とモチーフを比べ合っって描いていた佐々木さんに感心したのを思い出します。(才木)



1浪 入試直前(2月)

いつも石膏はいまいちなのに、この時だけは不思議と上手く描けた。幻の一枚。未だにこれを越えられていない気がして、悔しい。

「上手いっ!!」「何かをつかんだ気がする!!」レベルアップしていく上で、必ず訪れる一枚の作品。「このいつ現れるかわからない一枚を求めて、毎日、予備校で描き続けるのでしょうか。(才木)」



2浪 夏期講習(8月)

モリエールは結構好きです。

ただ上手いだけではなく、それぞれの石膏増の持つ特徴や魅力まで感じさせられるデッサンになってきました。毎日単調に石膏デッサンという同じ課題を繰り返すのではなく、作品としてよくするためにいろいろと悩み、探求した結果が出はじめていると思います。(藤木)



2浪 秋(9月)

先生にエレガントな花にしてくださいと頼んだら、素敵なモチーフを出してくださいました。楽しく描けて、モチーフも構図も気に入っている一枚。

丁寧な観察や美しいハーフトーンにより、絵が上品に大人っぽくなりました。(藤木)



2浪 秋(9月)

繊細な物が苦手な、ススキを出されたので、頑張って細かく描いた。中間色の綺麗なモチーフだった。

彼女は手が早く、描写力も高いのですが、繊細なモチーフの印象を外してしまう傾向がありました。この作品ではススキや稲の自然な生態がしっかりと観察できて心地よい空間に仕上がっています。(吉田)

基礎科生のあゆみ



油絵科昼間部在籍
高校2年生 4月立美入学
銀山めい さん

基礎科に通い始めたのが高校2年生の時だった。日本の美術の大学に入るのには受験があってこのままでは自分は受からないだろうと思い、母に相談し、自由にしたいと言われタチビに通うようになった。まずは美術が好きだが何がやりたいか分からなかったし美術は本格的にやったりできなかったのですが、この事で基礎科に入った。自分は緊張しやすい友達も出来ないだろうと思ってたがそんな事は無くあっという間に友達もたくさん出来てタチビに通うのが楽しくて仕方がなかった。

先生方もみんなフランクでいい人で話も面白かった。自己紹介カードといって、自分の情報(名前、誕生日、血液型、趣味など)と似顔絵を描いて壁に貼ったのも印象的で他の人を見るのも楽しかった。カードが増えた時に本人を探してみたり。基礎科は体験課題もあり、色々な科に触れられたので夜間部に移る前にはこれからやりたい事が決められた。行く科を最初から決めて行くのもいいが、基礎科に行って色々なものに触れてから決めるのもいいと思います!



高2 石膏デッサン[ラボルト]4月

初めて基礎科で初めて描いたデッサン。“とりあえず思うように描いて”と言われ、よく分からないまま描いていた記憶がある。全く描けなかったし訳わからなくて当時は他の人に見られるのが恥ずかしかったが、描き終わったら何だかこれから頑張るぞ!と思えた。



初めての油絵

この時期にデッサンを描いてる時いつも途中で嫌になってた。このとき体験課題があったので、気持ちを切り替えようと思い油絵を選んだ。初めて触れた油絵具はベトベトしていてニオイも変。ほんとにこれで絵が描けるのか不思議に思った。油絵の扱い方もよく分からないがとにかく描いた。上手くは描けなかったが何だかワクワクした。



高3 静物デッサン 5月

モチーフが全て黒なのは衝撃だった。カラスが描きたくて早めに席取りをした。モチーフがカラスということでワクワクしながら始めたがそのワクワク感とは裏腹で全く描けなくて悔しかった記憶。



高3 人物油彩 6月

「モデルさんを描きなさい。」という課題だった。動物が好きだったので(今も!)、何でもかんでも動物を無理やり絵に入れる事やっていた。モデルさんに蛇が巻き付いていたらカッコいいと思った私はそのまま蛇をモデルさんに巻きつけた。これを描いた時、素直にやりたい事が出来て楽しかった。



高3 人物デッサン 1月

鉛筆にはまって鉛筆ばかり使っていたこの時期。先生が木炭使った方がもっと(試験の時に)時間短縮出来るよと教えてくれたのに、不器用で頑固な私はあまり上手く話を聞けなかった。先生の言うことをちゃんと聞いて理解してればもっとやりたい事が見えてきたのかもしれない。



油絵科昼間部在籍
高校2年生 9月立美入学
川鍋理沙 さん

私は高2の6月にキノカに入学しました。周りはうまい人ばかりで、私は泥くさい自分の絵と周りを比べていつも悩んでいました。そんな時、講師に「しつこく観察して正直に描きなさい。テクニクがなくても、描く執着があれば強い絵になるよ。」と言われました。今でも、時間が足りないことを言い訳に観察をいい加減にして描いてしまった時や、テクニクに頼りきってしまった時にその言葉を思い出します。キノカは私に愚直に描くことの強さを教えてくれました。



ブルータスデッサン

はじめての石膏デッサン。似てないことは分かって、どこが違うのかは分からなくて何度も直した。目の前にあるものを見たまま写すことがどれだけ難しいかを実感した。



自画像デッサン

まだ木炭に慣れていなくて、初日はおそろおそろ描いていた。その後講師が「もっと思い切って描きな。木炭デッサンは消したりのせたりを繰り返して描いていくもんだよ」と言ってくれたので、おもいきった強い黒をのせることができた。



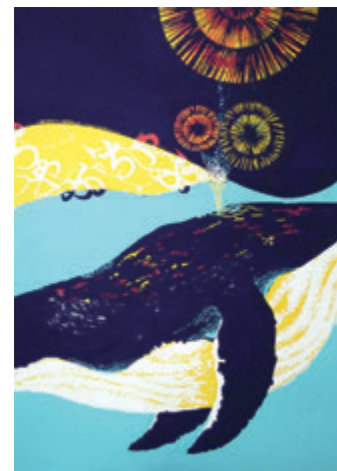
女性ヌードデッサン

油画科の春期講習で描いたもの。周りは受験科のうまい人ばかりだったのでかなり緊張した。モデルさんを冷やさないためにヒーターがいくつも置かれていたため、室温はかなり高かった。その暖かくてやわらかい空気が出せたらいいなと思って描いた。髪の毛や枕の質感を追うのが楽しかった。



ガットメラータデッサン

講師から「全部に均等に手を入れるのではなく、力を入れて描くところと少ない仕事でさえるところの差を作った方がいい。」と言われ、実践したときのもの。まだ差は出しきれていないが、このデッサンを描いたことで、それまでの見づらくて平面的なデッサンから少し変わった。



平面構成

花火の打ち上げとクジラの潮吹きが同時に起こった設定で描いた。絵の具のかすれや点描を見せたかったので、色は五色に絞って描くことにした。夏らしさを出せてよかったが、ちゃぶちゃぶという文字はあんまりTシャツっぽくなかったなと思った。

基礎科生のあゆみ



一浪 イメージ素描 11月

イメージ課題は資料が使えて、自分の世界に絵を持って行きやすくて割と好きだった。この時の課題文は覚えてないが2日間描く時間があったり徐々に没頭してネチネチ描けたから楽しかった。この年は末年だったから羊を描いた。まだ色々足りない絵だが、この絵が自分の調子に以前より少しだけ自信を持てたキッカケになったのかもしれない。



二浪 静物デッサン 8月

夏期講習中は暑くていつも夏バテしていた。体調があまり優れてない時、好きな馬頭がモチーフとして出たので集中力が続かない中、集中出来そうな馬頭に狙いをしぼり描いた。不思議とボーッとし過ぎないで徐々に集中して描けた。嬉しかった。



二浪 イメージ油彩 12月

油絵科に入ってからずっとよく分からなかった油絵がこの頃少しだけわかり始めた。わかり始めたというより楽しみ始めたのかもしれない。こういう画面にしたいとか今こういう仕事をしたら後からこういう仕事が出来るとか。考えが少しずつだがまとまるようになったキッカケになったのかもしれない。



二浪 イメージ油彩 12月

コンクールの課題が「日本をテーマに描きなさい。」だった。スケッチブックと初めてのF30号。やっぱり30号は大きかった。大きい分やはりいつもみたいにボーッとしてたら終わらないと思い焦った。焦っていたが、次やる仕事の事を考えながら描いたら楽しくなって一生懸命になれた。塩豆大福を3日間観察するのも面白かった。



マルスデッサン

デザイン科のコンクールの時のデッサン。描く位置は抽選で決められたが、運よく好きな場所に当たった。石膏像のゴロツとした立体感や重さを出したかった。立体感はいつより出せたが、肩周りに力を入れすぎて台や頭のレリーフがおろそかになった。手数を入れすぎて前光の感じがしなくなったのも残念。



リンゴ・インク・Gペン・任意の柄の手紙 平面構成

デザイン科最後の平面構成。平面構成はいつも焦ってぐちゃぐちゃになるので苦手だったが、この絵は冷静に描けた。描写が足りてないため弱い印象になってしまったが、自分の絵の中ではきれいに清潔に描けたので良かった。



地面とひびの油画

アスファルトのひび割れから植物が生えていく様子を描いた。自分の好きなものを正直に前面に出せたが、もっとアスファルトの質やひびの形にこだわればよかった。



女性と花の油画

油画科のコンクールの時のもの。全体的に見やすくまとめられたが、どこを見せたいのかが定まってない。終わっていないのが残念。



手のデッサン

油画科のコンクールの時のデッサン。握めるものというお題だった。寒いときにほかほかのあんまんを食べるシーンを描いた。いつもグレーの幅が狭くなりがちなので、意識的に白から黒の幅を広げた。

